私にとっての福祉

大口高等学校二年　永里 琉空

みなさんは「福祉」と聞いて何を思い浮かべるだろうか。私は高校に入るまでは、高齢者の介護をしたり、障害のある人を助けたりすることを想像していた。福祉は自分にはあまり関係のないことだと思っていた。そんな私の考えが変わったのは、祖母との関わりだった。私の家は七人家族で、少し離れて暮らしている。祖母は、腰が悪く今もリハビリに通っている。以前の私は、「リハビリが大変そうだな。」くらいにしか思っていなかった。しかし、祖母と一緒にいるとき、腰が悪いということは、ただ腰が痛いということではないということに気づいた。

例えば、祖母が椅子から立ち上がるとき、私はすぐに立てるのに、祖母は椅子や机に手をつきながら、ゆっくり立ち上がることがある。歩くときも、私たち家族と少しずつ距離が離れてしまう。

以前、家族で出かけたとき、私は最初「早く行こう」と思ってしまった。しかし、祖母の歩く様子を見ているうちに、私たちと同じ速さで歩くこと自体が大変なのだと気づいた。そこで同じくらいの速さで歩くようにした。すると祖母が「ありがとう。」と言ってくれた。その言葉を聞いて、このようなささいな気遣いでも祖母の助けになるのかと思った。

また、祖母が椅子から立ち上がろうとしているとき、私は「大丈夫。」と声をかけた。祖母は「大丈夫。」と答えたが、転んだら危ない一方で、手伝ってしまうと、祖母ができることを奪ってしまう気もした。そこで、少し近くで見守ることにした。祖母は、時間をかけながら、自分の力で立ち上がることができた。

その姿を見て、私は「助ける」ということについて考えるようになった。それまでは、困っている人がいたらすぐに手を貸すことが優しさだと思っていた。しかし大事なのは、相手ができることは見守り、本当に困っているときに、「手伝いましょうか。」と聞くことだったのだ。その人を見守りながら支えるのも福祉なのだと思うようになった。

私の父は理学療法士をしており、兄も父の影響を受けて理学療法士を目指して大学で勉強している。

ある日、父が祖母の体の状態を考慮しながら、安全な体の動かし方について話しているのを聞いた。私は今までは、リハビリをただの運動と思っていたが、細かい知識や観察が必要なのだと知った。また、父が祖母に「無理しすぎなくていいよ。」と声をかけている姿を見て、体を支えるだけでなく、相手の気持ちに寄り添うことも大切なのだと感じた。

私は将来、放射線技師になりたい。最初は、病院でレントゲンを撮影する人という程度の知識しかなかったが、調べるうちに、病気やけがを見つけるために必要な画像を撮影し、医師の診断や治療を支える大切な仕事だと分かった。

父や兄とは違う仕事だが、医療に関わり、人を支える点では同じだと思う。そして祖母のリハビリを通して、医療と福祉はつながる部分もあるのではないかと考えるようになった。病気やけがを治すことだけではなく、その人が自分らしい生活を送れるように支えることも大切だと思ったからだ。

祖母との生活を通して、私は人を「できるか、できないか」だけで判断してはいけないと思うようになった。以前よりできないことが増えても、大切な家族であることは変わらない。だからこそ、相手が困っていることや不安に気づき、その人に必要な支え方を考えられる人になりたい。

将来、放射線技師として働くことになったら、機械を正しく操作して検査するだけでなく、患者さんの気持ちにも目を向けられる人になりたい。病院に来る人の中には、病気への不安や検査への緊張を抱えている人もいると思う。そのような人に、少しでも安心してもらえるような声かけや対応ができる人にもなりたい。

私はまだ高校二年生で、医療や福祉について分からないこともたくさんある。それでも、祖母と生活する中で感じた「人を支える」ということを忘れず、これからも、もっと医療や福祉について学んでいきたい。

福祉は、特別な場所にあるものではない。家庭の中や学校の中、地域の中にもある。相手の変化に気づき、気持ちを考え、必要なときに支える。その一つ一つが誰かの安心につながっているのだと思う。そしていつか、自分の仕事を通して誰かの不安を少しでも減らし、その人が前を向くための力になれる人になりたい。